

特集：能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践

サービスラーニングの原則・基準を活用した PBL 科目の授業設計・運営準備ガイドおよび ワークシートの開発

石田 百合子^{*,**}, 石田 祐^{*(注1)}, 梶村 好宏^{*}, 松葉 龍一^{**},
根本 淳子^{**,***}, 鈴木 克明^{**}

Development of a PBL Guideline and a Worksheet Based on Principles of Service-Learning

Yuriko ISHIDA^{*,**}, Yu ISHIDA^{*}, Yoshihiro KAJIMURA^{*}, Ryuichi MATSUBA^{**},
Junko NEMOTO^{**,***}, Katsuaki SUZUKI^{**}

1. はじめに

アクティブラーニング (AL) 導入を促進する動きやそのための議論が活発に行われている。高等学校に対して行われた調査では、AL の視点に立った参加型授業の実施率は 75% を超えるものの、学校全体として目標設定や具体的計画を策定しているところは 1~2 割程度の範囲内と、まだまだ少ない⁽¹⁾。

A 工業高等専門学校 (以下、「A 高専」) は、国立高等専門学校機構 (以下、「国立高専」) の AL 推進実践校として教育改革を進めている。AL センターの設置、ラーニングコモンズをはじめとする学習環境の整備および AL 型授業の実践などの AL 推進にかかる取り組みを国立高専全体に発信、普及を行っている。学習者の能動的な学習を促す学習・教育手法の一つに、地域の課題解決や地域住民との活動を通じて学習するサービスラーニング (以下、「SL」) がある。A 高専は AL 推進実践校となる前から、主に正課外で有志の教職員と学生たちにより、30 近くの地域貢献プロジェクト

(以下、「地域貢献PJ」) を行っているが、教育効果を高めるための視点や教育手法としての位置付けが十分でなかった。サービスに比重が置かれ、学生が活動への意義を見いだせない、活動を学生自身の学びにつなげられていないといった課題を抱えていた⁽²⁾。

平成 28 年度から、A 高専の 63 名の全教員が 8~9 名で構成される学生のチームをそれぞれ担当する、地域貢献PJ を着想としたプロジェクト型学習 (PBL: Project-based Learning) 科目「Co⁺work (コプラスワーク)」(以下、「本科目」) が開講されることとなった。これは質的転換答申での「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修⁽³⁾」を、組織的取り組みとして行うことを意図する。

本研究では、全教員で担当する本科目の教育の質を保ち、教育効果を高めるため、授業設計および導入段階での教員への支援・介入ポイントを明らかにすべく、海外の SL 文献から整理した SL 実施の設計段階で押さ

* 明石工業高等専門学校 (National Institute of Technology, Akashi College)

** 熊本大学大学院教授システム学専攻 (Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University)

*** 愛媛大学 (Ehime University)

(注 1) 現所属：宮城大学 (Miyagi University)

受付日：2016 年 6 月 6 日；再受付日：2016 年 9 月 2 日；採録日：2016 年 10 月 21 日